

## 原『篁物語』の作者・成立年と

源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌——九六一年から九八〇年頃か——

安部 清哉

キーワード：原『篁物語』、作者、成立年、源順、沈淪歌人、

Keywords: the Tale of Takamura, Shiagahu Minamoto-no, author, making year, Chimirin, Kawaranoin-Kadan.

## 0 プロローグ

次の長歌の中に、『篁物語』と関わる部分がある。『篁物語』の和歌をよく覚えているものでも、また、その研究者でも、気付くのはなかなか容易ではないのではなからうか。『篁物語』中の和歌と関係するだろう箇所を、探し出してみていただきたい。

あらたまの 年のはたちに たらざりし ときはの山の 山さむみ 風もさはらぬ  
ふぢごろも 二たびたちし あき霧に 心もそらに まどひそめ みなしご草に な

原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌（安部）

りしより 物思ふことの 葉をしげみ けぬべきつゆの 夜半に置きて 夏はなぎさに  
もえわたる ほたるを袖に ひろひつつ 冬は花にぞ 見えまがひ 木のは木の  
はに ふりつもる 雪を袂に あつめつつ ふみみて出でし 道はなほ 身のうきに  
のみ ありければ こもかしこも あしねはふ 下にのみこそ しづみけれ たれ  
ここのへの さは水に なく鶴のねは ひさかたの 雲のうへまで かくれなく た  
かく聞えて かひありと いひながしけん 我はなほ かひもなぎさに みつしほの  
世にはからくて すみの江の 松はむなしく おいぬれど みどりのころも ぬぎか  
へん 春はいつとも しらなみの 涙にいたく ゆきかよひ ゆもとりあへず なり  
にける ふねの我をし 君しらば あはれ今だに しづめじと あまのつり縄 うち  
はへて ひくとししらば もの思はじ（国歌大観より）

似ている語句か表現が一部にあることに気付くところまで至りつついても、単に似ているという以上に、「瓜二」「対句表現」かとまでも言えるようなくくりをしていることまで読み取るのは、さらに難しいだろうと感じられる。

その部分にたまたまでも気付けたのは、安部（2010）において、『篁物語』の別の和歌と、『源氏物語』（浮舟）のある和歌とが、同じ主題を持ち、その要素同士がいわば対をなす対句的構造の和歌であって、引き歌の関係にあることを一度見出していたことが、幸いした。機械検索でたまたま見出した、とある「一つの単語」とその前後の構造が、『篁物語』中の和歌の構造と、安部（2010）での時のように、そっくりだったのであった。それが、この考察のはじまりである。

## 1 はじめに

本論で提示しようとするのは、平安和文の文芸作品『篁物語』（『小野篁集』『篁日記』などとも称されるが、以下、『篁』と略す場合もある）の原作者と成立年代に関わるだろういくつかの新しい事実の報告と、そこから推定される原作者に関するひとつの解釈である。

具体的には、『篁物語』中の和歌と、語、語句、表現、さらに思想と構造を同じくする一つの歌（上掲）を提示し、そのテーマ的類似についての考察から導き出せる選択肢の検討の結果として、一人の歌人でもある漢字者を有力な作者候補として提示する。さらに、原『篁物語』の成立年として、九六一年頃から九八〇年頃である蓋然性が高いことを述べてみたいと思う。

その作者説が影響する範囲は、『篁物語』ひとりにとどまらず、『宇津保物語』『落窪物語』の作者説に関する従来の説にも当然ながら及んでいく。『篁物語』全編の日本語表現と文学的テーマが、そのことの有力な推定材料となってくるという点でも、上記の新説は重要な問題をはらむことにも言及する。また、『源氏物語』中の夕霧をめぐる物語の構想にも関係してくる問題など、この研究テーマが広がっていく射程範囲について合わせて触れるところがある。この推定成立年代は、原『篁物語』としての成立時期を、安部が前稿・安部（1997）にて10世紀末頃とみた範囲内に矛盾なく収まるものであり、結果として、その説を補強する。なお前稿では、中世以降に何らかの加筆がなされたと認められ、それ以前の古い成立期の姿を「原『篁物語』』としているが、本稿でもそれを踏襲する。

本稿は、そのように、成立年代を推定した安部（1997）（以下では前稿Ⅰとする）、『源氏物語』の浮舟巻の和歌が『篁』中の和歌を引き歌にしていることを指摘した安部（2010）（以下では前稿Ⅱとする）の続編となるものである。なお、私事ながら身辺の時間的事情により省略した細かな考証は別の機会に送り、ここでは要点のみを取り上げることをご容赦いただきたい。

## 2 従来の作者説（仮の記述）

『篁』の作者については、従来、主要な文学辞典類のレベルでも（『日本古典文学大辞典』ほか）、具体的名前を挙げるものは、管見の限りほぼ皆無である。もちろん、個々の論文などでは作者に擬して名前を例示する程度のこともある。しかし、具体的な証拠を提示してのものではなく、また、その個々の説の候補名をすら敢えて例示する辞書もない。それほどに従来手がかかりが全くないと言ってよい状態であった。

従来の多くの先行研究などでは、むしろ、次のような婉曲な表現で、あくまで、このような創作を成し得る人の範囲を例示的に挙げるにとどまっていることが多い。

○「儒学者たる一文人の手によってありしよき日の象徴としての篁への追慕の念から最後のまとめが行はれた」（岩清水尚（1955）『日本文学史 中古』、昭和30・5）

○「平安中期以前に漢文芸作家の手によってなったもの」（山口博（1965）「篁物語虚構の方向」『文学・語学』35、昭和40・3）

○「平安末期の菅原氏・大江氏のごとき人々の誰か」「匡房のごとき人」（石原昭平（1977）「篁物語論」『篁物

語新講』、昭和52・5、傍点引用者、以下、傍点傍線部等も引用者)

○「和文芸に關してもある程度の素養があつたことはいうまでもないが、作者の表芸はやはり漢学だったにちがいない。」(仁平道明(1995))

これらは仁平(1995)の挙げる一例であるが、原作者についての材料の乏しさを窺い知ることができる。辞書のレベルになると、さらに名をあげることすら皆無であることにも、この課題が半世紀以上お手上げ状態であることをよく現しているよう。

本来なら、ここで、従来の作者に關する言説のすべてを網羅的に時系列的に列举すべきところであるが、煎ずるところ未詳というレベルであるので、その点については詳細を後日に期することとして、ここまで留めることにさせていただきます。

### 3 推定方法について考えたこと

#### 3-1 和歌の語・語句の比較と構文の比較と

さて、『篁』の作者を探る端緒は、その短くはなくなった研究史と、この20年間程でも(特に冥官説話の方面で)増えてきた先行研究論文(機会を改める)の数的な蓄積からみても、もはや見出せないかのように思われた。

一方、残されている方法は、新資料の発掘以外では、本文あるいは和歌における言葉や表現から、作者が残している可能性がある他の作品や和歌などの、他の資料との間で何らかの糸口を探り当てることぐらいであろうとも思われ

た。以下、ここでは、『篁』の地や会話部分での言葉ではなく、本拙論が提示する和歌の方に絞って話を進めておく。これまでも多くの先行研究で、和歌や本文中の語句には注目されてきてはいる。その中でも特に、井野(2008)は、『源氏』の浮舟巻の三首と、『篁』の三首の和歌との類似性を見つけ出し、『篁』が『源氏』の当該場面の構想の下敷きになっていることを、初めて指摘した。

そのような、関連のある和歌や作品の語句を照合する方法は、文学の特に歌の研究では広く普通に行われてきている方法である。また、語彙を探索してその用法を照合・比較する作業は、和歌の研究にとどまらず安部の属する日本語学の方では、基本的な調査方法として行われていることでもある。(それゆえにこそ、安部(1997)では、『篁』の成立時期を従来よりも具体的に実証的に示し得た。ここでは、ひたすら語と語句の使用法を、平安時代の他作品と愚直に比較し続けたのであった。)『篁』の中の和歌の語や語句、表現に対しての、そのような照合調査は、すでに悉皆的にそれ相応の量で行われてきている、というのが、先行研究までの結果であったと言ってよいであろう。その一方で、今回、残された方法として検討されたのは、その「照合」作業をより複雑なものにも対応させて、その質を上げてみることであった。結論的に言えば、拙論Ⅱ・安部(2010)で試みた方法を本稿でも応用する結果となったのだが、その方法を少し紹介しておきたい。

安部(2010)の『源氏』浮舟巻の歌との比較では、そのような類似語句を見つける作業を糸口しながら、単に1語・1語句あるいはその縁語語彙だけでなく、歌全体の構成の類似性を構文的配置のレベルまで注目してみることに意を注いでみた。『篁』中の歌を下敷きに『源氏』浮舟中の和歌が作られていると見なした。それによって、『篁』中の一首と『源氏』中の一首とが、あたかも瓜二つの対句的和歌表現のように一致するという結論を得て、引き歌の関係であることを指摘した。その一致は、表面上は異なるように一見見えるものが、歌の諸要素の構成のされ

方や歌の文法的構文においては、比喩的に言えばあたかも漢詩の「対句表現」のような相似性を示すものであった（仮に「対句的和歌」とでも仮称しておくことにしたい）。

その経験を生かし、本稿では2つの方法、すなわち、①従来から広く行われている語・語句・表現などから類歌を検索していく方法と、②前稿Ⅱで見出した方法、即ち、構文的レベル上での比較方法、という2つを応用した。言葉を替えれば、前稿Ⅱ（安部（2010））での比較が、従来とは異なる視点からの比較に気付かせてくれた、と言えようか（後述の比較を参照）。

今回の調査でも、①の点は従来と同じなのであるが、実は今回検討する二つの歌の比較部分では、昨今の膨大なデータベースによる、便利な単語掛け合わせ検索でも、一致はたった「1語」であった。単位に同じ語を（機械的に）探してみる、というだけでは、限界があることがわかる。結局、それ以外の語句でも関連があるかどうかを見出せるかどうか、という人間の方の感性がなお重要であることが結果としてわかる。それに加えて、②の、構文へ着目するという視点に立って分析を試みたゆえに、「対句」的構造のこの長歌（の一部）を、見出すことになった。その手作業的部分での手順を、簡略に箇条書きにしておく。

## 方法

- (1) 関連する同義語、類義語、対義語、類似語（意味だけでなく形態上での類似語＝類形語）、などを検索する。  
語レベルだけでなく、句や連語単位まで、思い付くもの、気付けるものは検索してみる。
- (2) 関連しそうな縁語、掛詞、序詞などの検索（例、「母」なら「たらちね」をも検索してみる、など）。
- (3) また、それらの語・語句・連語なども、関連しそうなものは、掛け合わせ（and/or）検索をする。

(4) 1〜3によって関連歌を収集し、さらに、その中から同様に関連語彙を収集して、それらについてさらに同じように検索してみる。

(5) それらの過程で、歌意の一致ないし類似する歌を収集していく。

(6) (これが前稿Ⅱの応用であるが) 収集した歌の中から、構文の比較によって、特に文法的構造の近似・類似する歌を選び出して比較検討する。

実際には、日本語学や和歌研究などでも行われているであろう、従来の方法とほとんど変わらない、泥臭い手作業が多い営みなのであるが、あえて、方法らしく他の方も応用して役立ちそうなかたちで書いてみた。もちろんこれら以外にも、時に次の(7)の作業で得られる和歌の情報も重要なものの一つとなっている。

(7) 上記の作業で収集された歌の解釈について、関連する注釈書・論文などを博捜することで、さらに関連する和歌の情報を得ることができる。(後述の『能宣集』の藤原能宣が順と関わるらしいということで検索してみた、というのはそのような作業による。)

ところで、これらだけの手順そのものだけで冒頭の順の歌こそが、問題となるものをはらんでいるという見込みを得たのか、というと実は否である。「みどり」という語が、鍵を握ってはいしたが、「みどり」だけでは、利用した「和歌&併譜ライブラリー」の検索結果では3,797件(検索条件で多少前後する)が当たり、一方、それを少し長い単位でみた「みどりのきぬ」の語句では、中古(中世以前)のものでは、他例は皆無であって、『篁』での当該和歌1首だけになってしまふのである。当該和歌の語句だけを頼りに検索しただけでは、単純には現れてこないことがわかる。「きぬ」の同義語の「ころも」に気付くのが、実は機械検索の範囲ではやっとならなかつた。(この「みどりの」)



きぬ」が一例と珍しいのは、漢語「(緑)袍」の訓読が意識されているためとみられる(後述)。

### 3-2 歌の構造比較——長歌の一部二十九文字との対応——

冒頭に引いた『源順集』の118番の長歌を再掲してみよう。『篁』との類似を検討してみたい。

118 あらたまの 年のはたちに たらざりし ときはの山の 山さむみ 風もさはらぬ  
ふぢごろも 二たびたちし あき霧に 心もそらに まどひそめ みなしご草に な  
りしより 物思ふことの 葉をしげみ けぬべきつゆの 夜半に置きて 夏はなぎさ  
にもえわたる ほたるを袖に ひろひつつ 冬は花にぞ 見えまがひ 木のは木の  
はに ふりつもる 雪を袂に あつめつつ ふみみて出でし 道はなほ 身のうきに  
のみ ありければ ここもかしこも あしねはふ 下にのみこそ しづみけれ たれ  
ここのへの さは水に なく鶴のねは ひさかたの 雲のうへまで かくれなく た  
かく聞えて かひありと いひながしけん 我はなほ かひもなぎさに みつしほの  
世にはからくて すみの江の 松はむなしく おいぬれど みどりのころも ぬぎか  
へん 春はいつとも しらなみの 涙にいたく ゆきかよひ ゆもとりあへず なり  
にける ふねの我をし 君しらば あはれ今だに しづめじと あまのつり縄 うち  
はへて ひくとししらば ものは思はじ (国歌大観より)

『篁』を研究している方ならば、「みどり」という語には気付けるかもしれない。そして、その「緑の衣」が六位の官衣の色で、「緑の色が持つ象徴性」に思い至れたならば、長歌全体が「任官」「出世」に関わる主題を持つこと、ひいては、『篁』の主人公・小野篁の行為（右大臣の娘に求婚して、間接的ながら立身をはかる）にも関わる単語でもあることにも思い及ぶであろうと思われる。この「みどり」はことさら特徴的な語なのである。

その意味では、特に和歌にこだわっていない研究者でも、その「象徴的な意味」（『源氏』でも使われる）からその特異な一語を見つけ出し、それと同時に、その一語と共鳴し合っているこの長歌の詞書の内容の重要性にもすぐに気付くことであろう。即ち、この順の長歌全体が、実はやはり、『篁』という作品全体の主題とも関わっている特異な関係を見出せるかもしれない。そこまで至れたならば、この両者に共通する一つの思想として、当時の低位・散位の方の貴族、知識人の嘆き——六位の沈淪の思想——が背景にあることを感じるのには、もはや時間の問題であろう。つまり、「緑」一語さえ共通単語として検索にて引っ掛ければ、その象徴性ゆえに、「沈淪の嘆き」までは気付ける人も出てくるようにも思われる。

一方、それらを考察してみても気づいたことではあるが、より広い課題は、むしろさらにその先の方に広がっているようである（8章、今後の課題とした部分参照）。その点は後述することとして、まずは、双方を比較してみることにしたい。

さて、問題となる『篁』の和歌と一致する「一語」は「みどり」である。そして、該当する部分は、末尾の次の部分である。

順の長歌 すみの江の 松はむなしく おいぬれど みどりのころも ぬぎかへん

『篁』中の和歌は、第一部で、篁が妹に詠んだ次の和歌である。

篁の和歌 あだに散る 花橘のにはひには みどりのきぬの 香こそまさらめ

この二首に完全に共通するのは「緑」の1語だけである。一方、漢字「衣」に「ころも」と「きぬ」の訓があるように、それが同義であるのは歌語ないし漢字「衣」の訓としては自明であるから、「緑」に気付ければ、「みどりの衣（ころも・きぬ）」も、一致していることに気付くことができる。

しかし、「衣」を加えても、一致すると見えるのは「緑の衣」だけであり、歌み込まれているのは、前者では、松と脱ぐ、後者は花の香りとその優劣、というように異なり、似ていると思える感覚からは遠い。

悉皆的検索をかけて、「緑」で3、797件の歌が一致したとしても、4、000近いオーダーでは照合するには気が重い。「緑のころも（衣）」と「緑のきぬ（衣）」までたどりついて、次には、それ以外に、直接的語句や表現での類似は一見すると認めにくいのが実際である。一方が、長歌の後半の五七五七五で、三十一音でないことも、「一致している箇所」とは思わせにくい。この上記引用部分の二十九文字と、三十一文字とを対照するという視点よりは、むしろ、「緑の衣」は「六位の衣（の色）」として、片や詞書と長歌の主題、片や主人公の身分と行動の方へと、その視点を広げさせてしまうことだろう。

この箇所を「類似している」と解釈させてくれたのは、前稿Ⅱで、『源氏』の和歌との共通性を解釈した、次のような構造比較が下地にあったおかげである。いま、これらと比較していくにあたり、「比較の手法」となった前稿Ⅱで示した『篁』の和歌と『源氏』浮舟巻の和歌との構造比較図を、抄録して再掲しておくことにする。このあとに解説する類似性をより理解していただく上での助けとなるということもあるが、それぞれの2つの対になっている歌の対照的構造自体にも、類似する共通点が見られると思われるからである（即ち、紫式部は順作のこの2首を見て知っていて、そのつくりを真似た可能性もあるので、比較のため再掲しておくことにする）。前稿Ⅱでは、次の『篁』中



\*\*\*\*\*

上記は、前稿Ⅱからの引用であるが、最後のところに「共通構文」として示したように歌意はほぼ同一であり、C―Gの図として対照的に示したように、構文自体が、あたかも漢詩の対句における対句構文かのように、きわめてよく一致している点の特徴である。

#### 4 源順と『篁物語』の2つの歌

##### 4-1 2つの歌の類似する語句と構造

さて、当該2首にもどり、対になっている語、語句、表現を列举して比較してみたい。これら2首は、次のように、片面は松の齡、片面は花の香りを写し出しているほぼ鏡像のような構造であることが見えてくる。先に挙げた浮舟巻での類似よりも、さらにより一層共通要素が多いことがわかる。

順	すみの江 <small>え</small> の	松は	むなしく <small>く</small> おいぬれど	みどりのころも	ぬぎかへ <small>へ</small> む
篁	あだに <small>に</small> 散る	花橋 <small>はなはし</small> の	にほひには	みどりのきぬの	香 <small>か</small> こそまさら <small>ら</small> め

対句的箇所を、語、語句、表現それぞれの視点から、解釈が部分的に重複する箇所も含め、対照させて左に示す。

内容

源順の長歌 ⇓ 篁の和歌 ⇓ 備考

【語彙レベル】

- ① 色彩語彙（完全同義語）      みどり      ⇓      みどり      || 六位の官人の朝服の色
- ② 衣装語彙（類義語）      ころも      ⇓      きぬ      || 衣服
- ③ 評価語「空・徒」（類義語）      むなしく      ⇓      あだに      || 思い・感情
- ④ 負の歌語的時間経過語彙（縁語）  
マイナス      老ゆ      ⇓      散る      || 衰退・零落
- ⑤ 優位への変化動詞（類義語）      脱ぎ替へ（る）（上位官位の服に）      ⇓      勝ら（勝る）      || 発展・出世
- ⑥ 意思・推量の助動詞      む      ⇓      め（む）      || 強い願望

【句や表現などの技巧的レベル】

- ⑦ 美的自然物を詠んだ主題      松の緑      ⇓      橘の香
- ⑧ 対象への視覚上の美的表現      「澄み」の江      ⇓      花橘（の「花」）
- ⑨ 対比対象の劣位表現      「空しく老いる」⇓「徒に散る」
- ⑩ 対比上の優位物      （松の緑より良い）「衣の色」⇓（橘の香より良い）「衣の香」
- ⑪ 自分の優位性の表現      「緑衣を脱ぎ替える」（上位に着く）⇓「緑衣の香こそ勝る」（上位である）
- ⑫ 各歌内部での構造の相似性（7章の図参照）
- ⑬ 歌意の意味的構成の類似

順⇓虚しく褪せていく（老いる）松の緑よりも、（今の緑の自分の）衣の色はより上位の色になるだろう。（長歌内においては、後続する「しらなみの」からは「なるだろうか？」と続く形）。

⇔

『篁』＝虚しく消える（散る）橘の花の香よりも、（緑色の朝衣でも自分の）衣の香は優れた香であるだろう。

共通する構文の構成（7章も参照）と歌意は以下のようになる。

◆共通する歌の構造

一般に優れてすばらしい《色／香》といわれる《松の緑／花橘の香》ではあるが、

虚しく《むなしく／あだに》、時が過ぎて衰微して《老いて／散って》しまえば（しまったものよりも）、

それに比べれば、自分の方《自分の【今後の】衣の色／自分の【今の】衣の香り》の方が、

優れているだろう《ことよ。／ものになるだろう（か？）》。

さて、一見「緑の衣」の部分のみの類似のように見えた2首であるが、このように対比してみると、非常によく似ていることがわかる。これらの諸点において、ほぼ対になっており類似歌という次元を越えて、あたかも鏡のように対照的でさえある。その意味で仮に名付けるとすれば、「対歌構造」とでも呼べるような瓜二つの鏡像歌になっているとも言えるであろう。

長歌の詞書を含む歌意と、『篁』内における文脈上の位置付けは、実は若干ながら、ずれもある。あえて異なる点を挙げておけば、「緑の衣」に関わる部分が、前者（順）では該当部分まで一度内容を切って解釈すれば「緑の衣をいつか脱ぎかえるだろう（優位となるであろう）」となって、確かに篁歌と対応している。しかし実際には、後に

「春はいつとも　しらなみの」（知らなみ＝わからないので）と続くので、疑問として続いていることになる。即ち、「六位の緑衣を脱ぎかえるだろうような人生の春はいつ訪れることかはわからない。」であり、もしそうであるなら、「脱ぎかえるだろうか？」の疑問であって、決して優位であることを断定する文脈ではない点である。ここではあくまで三十一文字以内ということで、「脱ぎ替えむ」までで切って、対歌構造を成すと見ておくことにしておきたい。参考まで、次に『篁』の和歌の歌意の方もいくつか紹介しておく。

◆『篁』中の篁の和歌の歌意

○旧日本古典文学大系本「徒に散る花橘の匂いよりは、（わたしの）緑の衣の香の方がまさっているだろう。」

○日本古典文学全集本「いたずらに散って行く、橘の花の匂いに比べれば、緑の色の着物——六位である私の着ている着物の匂いの方が、余程よい匂いがすることでしょう。」

○『篁物語新講』「いたずらに、はかなく散って行く花橘の匂よりは、（私の）緑の衣である六・七位の衣の香の方が勝っているでしょう。」

4-2 歌意の共通性とその意味するもの

さて、ではこの長歌はどのような意図で詠まれたものであったろうか。後回しにしていたが、詞書は次のものであり、九六一年の作詠であることがわかる。

「応和元年、勘解由判官の勞六年、いにしへになずらふるに、かくしづめる人なし、つかれたる馬のかたをつくりて、つかさの長官朝成朝臣にたまふに、くはへたるながうた」（国歌大観より、傍線引用者、以下同じ）



【大意】九六一年（源順五十一歳）の時、勘解由使の判官（三等官、従六位下相当官）の任にあり既に六年となり、昔の世と比べても、このように「沈淪」している人は他にいない。いま、疲れた（やつれた）「馬の絵」（異本「うまのし（馬の詩）」によれば、自らを「疲弊した馬に擬した漢詩」をつくり、それに長歌も添えたものか（神野藤昭夫）を作って、司の長官である藤原朝成朝臣に献上したものに添えたなが歌」（西山秀人氏校注『順集』（2012）での語句毎の脚注をわたくしにつないだ）

官位が長く留まっていることを嘆くこの「沈める人」（沈淪の人）は、「疲れた」馬の漢詩（あるいは絵）を作り、上掲の長歌も添えて、藤原朝成に直訴した、というのである。この内容は、奇しくも『篁』の第二部冒頭にある、右大臣に漢詩を作って直訴する次の場面を彷彿とさせる。

「時の右大臣のむすめたまへと、文おもしろくつくりて、内にまいり給とて、御車よりとりたまふ【ご＝頭注よりに、ついふるまいて、奉れたぶに、】（大系本）【日本古典文学全集本による訳】時の右大臣の姫君を、妻に下さいと、男は書状を趣向を凝らして作り右大臣が宮中に参内なさるとてお出かけの途中に奉った）

これと類似する行為が、順の長歌の詞書に（実際のこととして）記録されて、そして、長歌と瓜二つの構造のままに『篁』の中に詠みこまれていることを認めることができる。

歌の表現の類似と、上位者への歌（漢詩あるいは長歌）による、いわば直訴という2点の共通点は、どう見ても単なる偶然とは思われない。とすれば、この2つの作品での現象は、どのように解釈すべきであろうか。

○甲「偶然説」＝まったくの偶然の類似に過ぎない。

↑—2首の歌の類似度と、上位者へ直訴という共通点は、どう見ても単なる偶然とはみなしがたい。

○乙「模倣実行説」⇨何者かによって既に作成されていた『篁』を読んだ源順が、自分の身に照らしてあまりに類似する六位の境遇なので感じ入り、直訴の行為を真似ようと、共感する思いで長歌を着想して、「応和元年」に「長官朝成朝臣」に漢詩（？絵）と共に長歌を献呈した。そこにまったく同じ構成のそっくりの部分をわざわざ組み込んだ。

↑歌人であり梨壺の五人として、また当代の漢学者としても、既に一定の評価はある人物が、一部ではあれ盗作のような詠作を行うとは考え難い。

○丙「創作パロディ説」⇨源順の詞書と長歌を読んだ〴〵とある人物が、六位の主人公と主題の着想をそこに得て『篁物語』を構想した。順の長歌の中から、最後の方の一部を真似ることとし、三十一文字の和歌として、そこだけそっくりの類歌を作り出して組み込んだ。

↑「緑のころも」が六位の身分での不遇をも象徴することがわかっている人物で、かつ、歌語として「ころも」を敢えて「みどりのきぬ」と〴〵詠み替え得る〴〵独創的選択ができる人でなければならない。なぜなら、当時の「みどりのころも」「みどりのきぬ」と〴〵詠み替え得る〴〵はあっても、「みどりのきぬ」と詠んだ歌は、管見の限りでは、唯一この『篁物語』のみなのである。データベース検索の基準を少し緩め、独立に「みどり」「きぬ」の2語を詠み込んでいる歌で（andで2語検索）、その「きぬ」が六位の身を指す歌も皆無なのである（自然物の比喻のみ）。創作物語の中とは言え、語句の踏襲に厳しい和歌世界で詠むに当たり、他に例の無い表現を使うのは、ある程度の力量が求められよう。敢えて造語としてクリエイティブに詠める、相応の歌人か（順を含む、後述する沈淪歌壇の歌人達など）、むしろ、同じ作者（源順）こそが元の語句を作り変え得る立場にある、とも言えようか。

○丁「同一作者説」＝長歌の作者である源順が、「沈んだ無聊を慰めるべく」（後述）、同じ思いを主人公・小野篁に  
仮託して創作作品の中に組み込んだ。

○戊己庚辛壬癸 その他（略）

それらしくいくつか作文してみたが、前の3つの案の直後に、それぞれの解釈の問題点を記したように、かの源順  
が他人の作品をまねた可能性はまず考え難い。また、乙案のように、第三者が着想を得ることまではありそうである  
が、長歌のごく一部を選び、わざわざ同じ構造に模倣するという点まで見ると、それも起こりそうもないように思わ  
れる。となればもう選択肢などはないに等しいのではないだろうか。少なくとも『篁』の当該歌は、自身の長い長歌  
をもとにし、その一部を生かして短歌に詠んだ順自身の作と見なすのがもっとも自然であろう。そして、その『篁』  
中の当該和歌一首が、今日まで『篁』以外には、他のどの歌集などにも見られず、引き歌があるとも指摘されていな  
い以上（そのようなところから持ってきて『篁』に引かれたのでない以上）、この和歌がある『篁』全体が、長歌の  
作者である源順の創作である蓋然性が高いつも高い、とひとまず考えておいてよいように思われる。

#### 4-3 源順と『篁物語』とを結ぶもの

歌の共通性だけでなく、この解釈を支持する他の徴証は、多く指摘することができる。いま、ここで必要な範囲で、  
主要なものだけを簡略に列挙しておく。

(1) 前稿Ⅰで推定した原『篁』の成立年代（10世紀末期に主要部分が原『篁』として成立）と、順の生存期間（延喜

11 (911) ～永観元(983)年)とが矛盾しないこと。

(2) 「みどりのころも・みどりのきぬ」の類歌（「みどりの袖」「浅緋のころも」）を、順は他に少なくとも二首詠み、詞書での使用や関連表現を含めるとさらに数例見られること。長歌と合わせ計三首も詠んでいる歌人は、順以外にはいないこと（その二首は後掲）。

(3) 源順は、その長歌からもわかるように六位が長く、また、散位を嘆いているが、出世を希求する作品の主人公（小野篁）との間にも共通性があること。

(4) 長歌（詞書）にあるように、立身に関わって上位者に直訴を実行しているという点で、『篁』の主人公の行動との間に共通性があること。

(5) 『篁』の中の表現は、これまで『宇津保物語』『落窪物語』のそれとの類似が多く指摘されてきている。ところで、この二作品の作者として、現時点では、源順がもっとも有力とされている。これらの間における類似表現の理由は、上記の解釈のように、『篁』の作者も、源順である、ということ矛盾なく理解できるようになること。

(6) 『篁』には、次の2つの漢籍の逸話を踏まえたと推定される描写がある。そのような漢籍の知識を持ち、組み込めるだけの素養を持ち合わせた10世紀の歌人として、順はふさわしいこと。その典拠漢籍の逸話として、仁平道明氏によれば、『孔子家語』本姓解第三十九における孔子の父と母の結婚に至る経緯を語る部分のうち「三姉妹の末娘」を娶ったという話が、『篁』の第2部での末娘を娶る場面の下敷きという。また、『蒙求』「陸續懷橘」（そのもとになっている『三国志』卷五十七・虞陸張駱陸吾朱伝第十二）における饗応時に供された橘を（母のため）懐に入れて持ち帰る話が、大学での宴での橘を妹のために持ち帰る設定に生かされているという（仁平道

明（1995）

(7) 順の「沈淪」の嘆きは、彼が交流があった「河原院歌壇」の歌人たち（犬養（1967））にも共有されていて、それだけ、「緑の衣」を歌に詠み込んでいる順の六位への嘆きが周囲に共有され知られていたこと（後述6章参照）。

(8) その他、『篁』の主人公である学生（篁）のイメージ（服装ほか）や設定（角筆や点図を使うことなど）は、漢学者でもある源順の身边世界が描写されていると見なし得ることなど、は略す。当初は、「緑の衣」を詠んだ他の歌人たちも考慮されたが、この点で順が最も近いと考えられた。

以上から見て、順が作者である蓋然性ももっとも高いと見なしておくことが許されるだろうと考える。

#### 4-4 『長歌と『篁』の前後関係』

なお、長歌と『篁』の成立の前後関係は、どのように考えられるだろうか。簡略にいま書いておくが、作品が完成し何らかのかたちでそれが知られ得るような状態になった後には（公開するかどうかは別としても、意識的に秘匿しておくのでない限りは）、作品内の架空の出来事（右大臣への直接行動）と類似することを、この長歌の詞書のように実行したのでは、如何にも、創作世界と現実と混同したかのようで、後々物笑いの話題になりにかねない。そのような批難を受けることは危惧するであろう。そのような前後関係（『篁』先行）は想定しにくいように思われる。むしろ、長歌や他の同様の和歌（後掲）を詠むうちに思いがつのり、創作に及んだと考える方が自然なように思われる。次に、長歌に年号があるので、成立時期についてもさらに検討を進めてみたいと思う。

## 5 源順の「緑の衣」および漢語「緑袍」

### 5-1 源順の長歌以外での「みどり」の「六位」表現

長歌の当該部分が、『篁』の歌と相似関係である点からみて、長歌の詠作に近い時期に、作品の着想も得ていた可能性が考えられようか。

長歌の応和元年は961年、源順51歳の時にあたる。一方、順の生存期間は、延喜11(911)年から永観元(983)年没とされるので、最下限としてはまずは983年ということになる。

さらに、「緑の衣」や六位に関する順の記録を探ってみると、類歌(「深緑」「松」「あさあけの衣」「沈み」と、詞書における類似表現(「年経ぬる」「緑の袖」「沈める身」など)を見出すことができた。

● 深緑松にもあらぬ浅<sup>浅緑</sup>緋の衣<sup>浅緑</sup>さへなど沈みそめけむ(源順集、274、天元二(979)年に一条大納言の石山参詣の時の詩歌に和した歌、西山秀人『三十六歌仙集(二)』より。「あさ」は「浅」(↑深)、「朝」(↑明け↓沈み)を懸けるか。「朝緋」とする注解あり。)

次は、和歌ではないが、『曾祢好忠集』に収められている順の「百首歌」の序に「緑の袖」が見える。【補注】  
● 「月の桂を折らざらむも苦し。(中略)年経ぬる緑の袖のしのびに落つる紅の涙にぞひちにけるを(下略)」(曾祢好忠集、484以下の順の「百首歌」の序、和歌文学大系54)

また、「衣」類はないが、「深緑」とやや複雑な心境(沈淪?)を込めた次の歌がある。

● 小松引く人には告げじ深<sup>深緑</sup>緑小高き陰そよそはまさされる(源順集、275、天元二年「同年十二月の頃ほひ、宣

旨にてたてまつる御屏風の歌 子の日遊ぶ人『三十六歌仙集(二)』

さらに、「順集」のいわゆる「齋宮野宮庚申歌合歌」の詞書の中に関連する表現が見られる。【補注】後半参照)

●(全略) 順が頭のふゞきは夏冬も分かぬ雪かとおやまたれ、心の闇は唐にも倭にもすべてつきなく、御前の遣水に浮かべる残りの菊に思ひあはずれば、和泉ばかりに沈める身はづかしく、名に高き衣笠岡に照るもみぢ葉を見渡せば、かゝる円居に候ふことさへまばゆけれど、「さもあらばあれ」と、人こそ聞きて誹り一笑はめ(下略) (源順集、163の前、『三十六歌仙集(二)』)

以上のように、順の使用はひときわ多いのである。これらの表現との比較のため、先の2例を併記しておく。

●《順の長歌》 すみの江の 松はむなく おいぬれど みどりのころも ぬぎかへむ

●《『篁』の歌》 あだに散る 花橘の にはひには みどりのきぬの 香こそまさらめ

すなわち、『篁』の「緑のきぬ」に関わる順の表現は、歌・序などにて、「緑のころも」「緑の袖」「あさ緋のころも」の3度におよぶということになる。加えて、4度とも、衣服部分の語彙を変えている点は興味深い。

## 5-2 漢語「緑袍」の訓読語

「みどりの衣ころも」の語原としては漢語の「緑衣」か「緑袍」が疑われる。日本での用例は、『日本国語大辞典2版』では初出として「緑袍」が11世紀半ばの『本朝文粹』を、「緑衣」が12世紀半ばの『本朝無題詩』を挙げるが、10世紀の例は未見である。袍は『名義抄』に「コロモ」「ウヘノキヌ」とある。「緑袍」の受容が先であるので、最も可能性が高い白楽天をあたる結果として「江宴別」に「燈下紅裙間緑袍」が見える。女性の「紅裙」との対でありマイナス

の意は取れないが、官衣の色でもある。「緑の衣」は白居易ほか漢詩での漢語「緑袍」の漢文訓読語として受容された可能性が高からう。因みに「緑のきぬ」と詠むのは中古まででは源順のみであるが、「袍」の訓の一つ「ウヘノキヌ」を知っているもの、つまり、漢語「緑袍」を熟知しているものらしい歌語「みどりのきぬ」への詠み替えとみなせようか。

なお、これら以前に六位を表して「緑衫みどりぎのうへのきぬ」（『伊勢物語』『色葉字類抄』）ほか、日国による）、また「緑なる袖」（『後撰集』812）がより古い事例として見られる。沈淪の嘆きはこれらにはまだ認められないので機会を改める。

## 6 「河原院歌壇」の歌人に共有された「みどり」の「ころも・そで」

### 6-1 曾祢好忠の「緑の袖」

実は、六位を表す緑を詠んだ歌は他にもいくつか見出すことができる。曾祢好忠に2首、大中臣能宣に3首、弟子の源為憲に1首ほかが指摘でき、しかも、これら3名は順とは無関係ではない。

曾祢好忠の和歌は次の2首である。

◎松の葉の緑の袖は年ふとも色かはるべきわれならなくに（曾祢好忠集、424、和歌文学大系54）

◎住の江の松は緑の袖ながら名をだにかへばものは思はじ（曾祢好忠集、482、和歌文学大系54）

後者の「住の江の松」は順の長歌にもある語句である。



6-2 藤原能宣の「袖の(深)緑」「緑(の)(年経たる身慣れ)衣」

能宣集には、2首、関連する歌を含めると合計3首の歌が見られる。

◎松ならばひく人今日はありなまし袖の緑をかひなかりける (能宣集、32、詞書あり、増田繁夫『能宣集注釈』)

さらに、詞書が「源順、官<sup>つかさ</sup>えたまはらで、」(略)で始まる長歌に次のように詠まれている。

◎「月の桂ををるまでに 時雨にそほち 露に濡れ へにける袖の深緑 色あせがたに いまはなり かつ下葉より 紅に 移ろひはてむ よにあはば こ高きかげに あふがれむ ものここそみれ 塩釜の(略)」

(能宣集、447、詞書あり、『能宣集注釈』)

その長い詞書には次のようにある。

◎四四七「源順、官<sup>つかさ</sup>えたまはらで、世を恨みて、朝忠<sup>アサタカ</sup>の中納言のもとに、長歌よみてたてまつりたりけるを聞き侍りて、人々あはれがり、歌よみなどしはべりしかば、心ひとつに和し侍りて、よみはべりし」

周囲の友人がみな、順の散位の嘆きを共有し同情していた様子がよくうかがえる。このような状況も、『篁』創作との関係を考えさせる。なお、「朝忠の中納言」については、増田繁夫氏は「(前略) 応和三年五月任中納言。なぜ朝忠に訴えたかは不明。朝成の誤写の可能性もある」(『能宣集注釈』)とする。誤写でない場合は、九六三年頃にも朝忠中納言にも二度目の直訴とも言える長歌の献上をしたことになるか。任官を乞う申文も少なくとも2度も奉じているので別の機会における朝忠中納言への長歌の可能性も考えられる。

また、「緑」と「衣」、時間経過を表す縁語とも言える「年経る」「なれる(馴れる)」が見られるものの、やや歌意を異にする歌(詞書参照)に次のものが見られた。

◎緑より朱紫の雲の上にはこはとしへたるみなれ衣ぞ（能宣集、445、詞書「ひろかずが蔵人になり侍るに、叔父の修理大夫、下襲、表袴おこせ侍りとて」、「能宣集注釈」）  
官位を表す「緑」と「衣」があるので類歌と言えよう。  
もし順でなければ、次はこの能宣がうたがわしい。

6-3 藤原為憲の「松の深緑（沈める影）」

さらに、『新古今集』には源順としてあるが、「順集」の詞書により、その弟子で『三玉絵詞』の作者である源為憲の歌であることがわかる次の歌がある。

◎老いにける渚の松の深緑沈める影をよそにやは見る（順集、273、天元二年（979）、『三十六歌仙集（1）』）

（老いにける渚の松の深緑沈める影をよそにやは見る（新古今、源順として、1709、新全集）

6-4 藤原輔尹の「緑の衣」と「宿世」

やや遅れて、藤原輔尹（？-1021、官吏、歌人、漢詩）には次のような断片が伝わっている。

4 たひらの「      」なげかれぬみどりのころもたへぬわが身は（輔尹集、4、彰考館文庫蔵 巳・八）

不明の部分は、詞書「たひらのゝまつにあへるほどに」（国歌大観）を考慮すると、

◎たひらの（平野？）の松？□□□□□□ 嘆かれぬ 緑の衣 たえぬ我が身は

のように推定される（さらに推しはかれれば「松の色さへ」か？）。藤原輔尹は、その歌八首が『源氏』中の歌ないし

描写との関係があるかと指摘されている人物である（増淵勝一「紫式部とその周辺資料」『源氏物語講座』第6巻、寺本直彦（1973）「源氏物語と同時代和歌との交渉——和泉式部の歌の場合——」『源氏物語・枕の草子研究と資料（古代文学論叢第三輯）』武蔵野書院）。いわゆる沈淪歌人ではないものの、『源氏』との関わりという点では注意される歌人である。

これ以外にも藤原輔尹には、「ころも」と関連語である「色（変へぬ）」「脱ぎ垂れて」「万代（よろずよ）」を読み込んだ次の和歌が、田中塊堂氏によって新たに提示されている（田中塊堂氏「91、92 屏風詩歌気切」、下中邦彦編（1965）『書道全集』12）

◎ いろかへぬやまのころもぬぎたれてよろづよまでにつかふべきかな

（色変えぬ 山居（山井）の衣 脱ぎ垂れて 万世までに 使（仕）ふべきかな）

「（山の緑の）色変えぬ衣」で、他の「緑の衣」と同様に、沈淪の嘆きを感じることができると歌である。

この和歌は輔尹集には収められていない。紫式部の使用資料を追って、増淵勝一（1971）にてお教えいただいたものである。輔尹は、いわゆる河原院歌壇には含まれていないようであるが、六位が長いことへの自らの嘆きがあり、自立的な優位さが無い点でも沈淪歌人たちとの共通点があり注意される。

ところで、輔尹の和歌が『源氏』に影響を与えた可能性については上記に挙げたが、その点に関連して、「輔尹集」には、『源氏』での「六位宿世」（2例）という語句と関わる、さらに興味深い「宿世」の使用がある。それは、「輔尹集」の冒頭1首目の和歌に現れている。

花山院位につかせ給し年、□（一字分空白）そはかくしう人にもしらぬ大かくのすけにて侍しを、あはれなるものなり、いかでとくいたしたてんとおほせこと侍し比、秋の月いとをかしきに、その心を人くよみは

へりしに

1 ひとしれぬすくせもいまはたのまれぬ 月のさや○（け）きよにしあへれば  
「六位」とはないが、多く正六位下相当である「大学の助」の身を嘆く歌に「宿世」という、勅撰集には見られない漢語が読み込まれているのが注目される。

沈淪歌人で「宿世」の用語を使用しているのは、この四年前の源順（漢文、後の記録ではあるが『本朝文粹』）とこの輔尹の和歌しか、いまのところ見出せない。増淵（1971）の御指摘のように、輔尹集の和歌が『源氏』に響しているとすれば、夕霧の運命を象徴する語句として、突如『源氏』に2例も現れる「六位宿世」という熟語は、沈淪歌人の「六位」と「源順↓輔尹」の「宿世」をもとにした、紫式部の造語であった蓋然性が高いと推定される。

この「輔尹集」冒頭の1首と詞書は、『源氏』の「六位宿世」という夕霧物語の全体の構想にも関わる重要な歌と思われる。

#### 6-5 藤原顕季の「緑の袖」

さらにやや時代が降るが、藤原顕季（1055～1123）には次の歌がある。

◎雲の上をよそにのみきく身にしあれば みどりの袖もなにかはせん（顕季集、いま和歌ライブラリ検索か）

#### 6-6 源順の「物語」観

さて、これらの歌人のうち、藤原為憲は弟子故にいま置くとして、複数の和歌で詠んでいる好忠、能宣の2人より

も順を原作者として優先させたのは、次のような理由による。

一つには、上述のような歌の構成における一致及び4-3の諸観点である。いま一つは、順の百首歌の序〔曾祢好忠集〕にある以下のような「物語」あるいはその創作にかかわる彼の明確な思想が認められるからであった。

「もの言はぬ花鳥にもものを言はせ、心なき草木を心ありがほにいひなしてだに常ならぬ世を慰めんと、思ふ心しもあれ、胸の氷もとけ、心の思も消え、また沢の松をのみ切りて」(曾祢好忠集、484以下の順の「百首歌」の序、和歌文学大系54)

和歌の詠作だけに限らず、このような、いわゆるつくり物語というもののとらえ方をも含めた創作意識ともみなせる思想は、物語の創作のモチベーションの一つであったことを推察させる。この思想は、弟子である源為憲に引き継がれ、『三宝絵詞』では次の表現で現れている。これも併せて考慮される点である。

『三宝絵詞』序にも、次のような類似の表現がある。

「物ノ語ト云テ女ノ御心ヲヤル物、オホアラキノモリノ草ヨリモシゲク、アリソミノハマノマサゴヨリモ多カレド、木草山川鳥獸モノ魚虫ナド名付タルハ、物イハヌ物ニ物ライハセ、ナサケナキ物ニナサケヲ付タルハ、(中略) 沢ノマコモノ誠トナル詞ヲバムスビオカズシテ、イガラメ、土佐ノオトゞ、イマメキノ中将、ナカキノ侍従ナド云ヘルハ、男女ナドニ寄ツ、花ヤ蝶ヤトイヘレバ」(下略)〔序〕(新大系本より) (二重線部、波線部は、順の長歌での同じ傍線部と比較参照されたい。)

ここでは、これらも考慮して、源順の蓋然性を優先させたことを触れておく。

さて、順の長歌の応和元年は961年、源順51歳。天元二(979)年の和歌は、69歳である。没年は、永観元(983)年。この間に、六位の「緑の衣」を詠み「沈淪の身」を嘆いている。『篁』はおそらくそのような散位の時

期に、「常ならぬ世を慰めんと、思ふ心」から「胸の水」をとかし、「心の思ひも消」すために、手すさびに綴られたものではなからうか。とすれば、およそその時期は、961年から980年頃（最下限は没年983年）までと見ておくことができるように考える。これらを踏まえた詳細な考察は別稿を期したい。

なお、作者として源順を、具体的資料とともに提示した説は、管見の限り見られない。

## 7 「対句的和歌構造」の発想と漢詩の対句

前稿Ⅱ・安部（2010）と本稿で、対になっている2対の和歌を提示した。本歌取りや類歌というような関係にある歌同士の場合でも、表現の類似部分の多寡はあるものの、歌の構成要素の配列や構文の点で、これほどの類似を示すものは、そう多くはないのではないだろうか。1対だけだった前稿の時には感じなかった違和感を、今回の2組目で覚えた。

それは、執筆者が和歌専門ではなく、あくまで国語学の世界にいる人間の経験範囲での感覚でしかないことをお断りしたうえで敢えて触れさせていただければ、単なる歌の模倣や類歌詠作とは異なる発想と営みが、背景にあるのではないか、というものである。その背後に隠れている発想の正体を、順と漢詩文というキーワードをヒントにして具体的に言えば、これは「漢詩の対句」の技法ではないか。対句と言ってもこれら2首は、相異なる別作品であって、例えば長歌内に並列させて対置させているのではないが、明らかに「対句」の技法の延長が発想のものになっている、と思われた。だからこそ、語・語句・表現だけでなく、構成（文法構造）すらも一致し相似化させる必要があった。構成・構文の一致は、偶然なのではなく、この「対句的和歌」では言わば必須の要素でもあった、と思われた。

具体的に解説するために、いま、対句の代表として、短い漢詩を1例挙げておこう。

「春望」

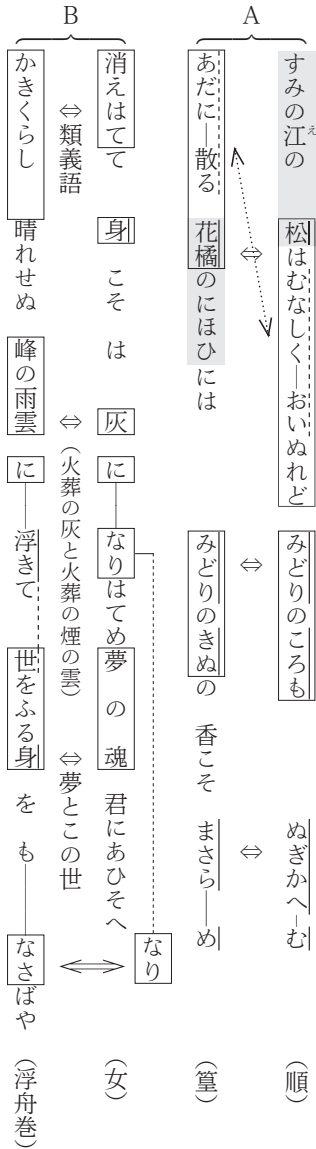
国破 山河 在 (国破れて山河在り)

城春 草木 深 (城春にして草木深し)

感時 花濺 淚 (時に感じては花見も涙を濺ぎ)

恨別 鳥驚 心 (別れを恨んでは鳥にも心を驚かす)

1句と2句、3句と4句で詠まれる語・語句等の材料は「異ならなければならない」が、構文・構成は「同等、近似(相似)でなければならぬ」。題材は異なっているけれども、各々の意味している内容は、「同趣でなければならない」のがそのルールである。再度、先の対をあげておこう。



「あだに散る」と「むなしく老いぬれど」の位置が、前か後ろかの相違は確かにあるものの、漢詩の対句、そのものと言ってもよいほどの相似関係に見えないだろうか。

同一作者ではないが、前稿Ⅱで対比した、『篁』と『源氏』の和歌も、右の2首ほどではないが対句的相似関係を成していると見える。

これらの2対は、漢詩の対句をあたかも和歌の世界にて実現したものであるかのようなものである。仮に「対句的和歌」（対歌）技法と名付けておこう。この2組の間に見られるような類似は、あたかも紫式部が源順の対歌を見て知っていて、それをまねたのかとすら思われてくるほどである。このような技巧の指摘は、和歌の門外漢ゆえ未確認であることをお許しいただきたい。

いずれにせよ、少なくとも源順は漢学の世界にあり、漢詩漢文を自家籠中の物として縦横に駆使もでき、かつ、歌の世界でも優れた詠み人であった。さらに新奇な試みをもやっただけの新進性・進出性をも併せもっている創造的人物でもあった。当該の時代内に見ても、この源順のみ、あるいは、順を含めて数名の範囲——例えば、梨壺の五人や、いわゆる河原院歌壇の歌人と呼ばれる人々——のみが共有し得た高度な営みだったことだろう、といまは推定している（機会を改めて深く考えてみたい）。

## 8 原『篁物語』が源順作である場合の研究の射程——今後の課題として

既に紙幅が少ないので、この作者説が妥当であったとした場合に視野に入ってくる影響範囲を、以下に簡条書きに留めておくことにする。以下の記載に関係する先行研究は多いが、挙げていくには多く、挙げれば各々の説明も多く



必要となるので詳しくは別稿に譲り、ここでは先行研究名を割愛することをお許しただければ幸いである。

(1) 『宇津保物語』『落窪物語』作者説への検討材料としての『篁物語』全編

『篁』の作者が源順である可能性が高くなれば、これまで有力な証拠に乏しかった『宇津保』『落窪』の作者説に、『篁』全編が有力な検討材料を提供することになる。周知のように、この2作品と『篁』との類似点はこれまでも多数指摘されてきているからである(以下略)。

(2) 「河原院歌壇」「沈淪歌人」との関係

「みどりの」―「ころも・そで・きぬ」は、順だけでなく、曾祢好忠・大中臣能宣ほかにも使用があり、かれらをつなぐ関係は「河原院歌壇」と呼ばれる歌人群であることに、和歌の研究史は視線を導いてくれる(いま犬養(1967)のみを挙げておく)。歌の技法、歌語の独特の使用、「沈淪」という共通の背景、河原院を中心とする政治的な位置や背景など、上記3名以外のこの歌人群との関係からも、『宇津保』『落窪』(既に一部に指摘はあるが)と『篁』の創作は検討する必要がある(以下略)。

(3) 「河原院歌壇」という文芸集団工房への視野

源順が、『宇津保物語』『落窪物語』そしてこの『篁物語』を作成したとなると、『竹取物語』の作者候補でもある)、特に、複数編者説もある『宇津保』はその長さや内容の多様さもあり、その発想や構想とその背景にある情報の源がどのようなものであったかが、視野に入ってくるさらなる問題である。

順が『和名抄』を編纂した背景や、順の弟子である源為憲が『三宝絵詞』を選進した背景の問題も関わってこようが、さらに、その『三宝絵詞』にも散逸物語の名前が列挙されており、能宣には『能宣住吉』の議論がある。

天曆期前後頃の物語群には、竹取・伊勢・大和・平中・宇津保・落窪だけでなく、特に、25、26篇ともいう散逸物語群——からもり・はこやの刀自・舎人の閨・かもの物語・伊賀のたうめ・土佐の大臣いまめきの・中将・長居の侍従・伏見の翁・をはり（尾張）法師・住吉（原住吉）など——がある。この時期のこれら膨大（残されている作品数から言えば）な創作作品に、上掲の「常ならぬ世を慰めんと、思ふ心しもあれ、胸の水もとけ、心の思も消え」という「物語観」を残した順や、「物ノ語ト云テ女ノ御心ヲヤル物」と記した為憲、いわゆる『能宣住吉』を残した能宣らかの関わりを持っていなかったらどうか。

想像をたくましくすれば、散逸物語の少なからぬ数のものが、彼らの創作活動によるものではなかったか、ということを考えさせる。飛躍した空想と思われそうであるが、「河原院の歌人」の研究をたどっていくと、既にその点を指摘しているはるか先達の言及に至り付く（今、山口博氏の名を挙げておく）。あたかも「創作工房」であったかのようなその存在についても機会を改めることにしたい（以下略）。

（4）「沈淪」の主人公——夕霧物語全編の構想の背景としての「六位沈淪」というテーマ【補注】も参照）

井野（2008）は、『源氏』の浮舟巻のごく一部分であるが、『篁』の一部を下敷きにしていることを指摘した。

しかし、今回の源順における「六位での沈淪」（上記長歌だけでなく、それは沈淪の歌人に共有されていた境遇であった）と『篁』での主人公・小野篁の六位での描写全体とを視野に入れる時、われわれは、もう一方の主人公であ

る夕霧が「六位沈淪」をその背景に持っていることに気付く。ことは、既に『篁』のごく一部のプロットというレベルに留まるものではないだろう。また順一人のものだけでもなかっただろう。

河原院歌壇の沈淪歌人全体が共有していたものが、少なくとも、『源氏』の中の夕霧物語という構想全編に何らかの影響を与えていた可能性があることになる。あえて言えば、間接なのか、何らかの媒介のある直接のものなのかは今後の考察が必要であるが、『篁』の一部が下敷きなのではなく、『篁』の構想の全編およびそれをうみだした背景全体が影響しているともみていくべきなのかもしれない(以下略)。

(5) 『源氏物語』への影響——「浮舟」巻、夕霧の六位構想、六条院構想と河原院歌壇のサロンとしての融邸宅

『源氏』の夕霧構想の背景には、「六位沈淪」がある。次の課題は、紫式部はどのようなかたちで、そのテーマを内に取り込むに至ったのだろうか、という点である。

「六位」とその衣装の色「みどり」だけではなく、「あおいろ」「あさみどり」「あさぎ(色)」「若葉」などの語句が、沈淪歌人以外のところで最も多く引き継がれているのも、実は『源氏』なのである(用例などは別稿を期す)。

順の「沈淪」は、いわゆる「河原院」の歌壇の歌人に共有されており(上掲の詞書など参照)、また、その中の少なくない数の歌人が「沈淪の歌人」でもあった。

ところが、なにより、その「河原院」こそ、『源氏』の主人公・光源氏の邸宅「六条院」のモデルである。そして、その河原院の主人・源融は、光源氏の有力なモデルなのである。沈淪歌人たちが様々な創作活動を行っていないがらつどっていた「河原院」そのものが、『源氏』そのものと深く関わっているという一致も、偶然ではないだろう。

『篁』との一致が、浮舟巻の一部や「夕霧」(六位沈淪)とのことだけではなかったのではないか、と考えると、従

来、紫式部が六条院や融をモデルのイメージの一つとしていた、というのみにとまらない問題をはらんでくる。なぜなら、その「河原院」という空間への連環の領域には、上記のような歌だけでなく膨大な物語群を創作していた可能性の高い歌人集団が、一方であたかもそこで「作品創作工房」を成してでもいたかのような「河原院歌壇」サロンを形成していたと想像されてくる。

即ち、触れておきたいことは、紫式部が、彼らの歌以外にもおよびが創作活動からの一切の情報も交流もなく、また、河原院の後の主・安法法師へと続く歌壇歌人の創作（少なくとも歌の）や交流ともまったく無関係で、その屋敷と主への懐旧のイメージだけで『源氏』が構想されたという単純な受け止め方だけでは、もはや不十分なのではないだろうか。

「河原院歌壇」の創作活動と紫式部との関わりは重要な今後の課題と思われた（以下略）。

以下は主に、日本語学の視点からの課題である。

(6) 紫式部の『源氏物語』での独自の日本語語句と沈淪歌人の語法との関係

『源氏物語』での語彙・語法には、それ以前の作品には稀なあるいは未見の、語・語法が少なからずみられることは、日本語学でも注目されている。作品が長編であるゆえに、その種類もそれぞれの使用頻度も少なくないので、極めて目立つ特徴となっている。文芸作品としての後代作品への影響というだけでなく、日本語の語彙、表現としても、それらが後代に影響している点でも、その特徴は看過できない。紫式部の独特の感性と云ってしまえばそれまでであろうし、従来もそのように看過されてきたが、あまりに多いその独自の語彙・語法は、いったい何に起因するものなのかという点も個人的には注目してきた課題であった。

ところで、沈淪歌人達の歌にも、その語彙・語法に特異な点がすでに指摘されていることが注目される。源順や曾根好忠ほか、関係歌人の新規の、あるいは、独自の特異な語彙・語法の使用やその発想自体が、紫式部の感性に影響したという可能性はなかっただろうか。その点が、日本語学だけでなく文学史的にも、極めて興味深い課題になってくると思われる。

その関連性、影響関係をうかがわせる具体的語を一部だけ示しておく。まず「沈む（四段）」「沈む（下二段）」という語は、『源氏』の中で、身分・官位などでの没落、零落や、昇進なきことによる精神的失意・沈潜などを表して使われているが、これらの語が『万葉』以来の物理的沈降・没入以外のこれらの意味で使用されるのは、沈淪歌人の歌と『宇津保』（作者は順が有力）以外では、『源氏』以降と見られるのである。

また、順の用語としては、「緑・深緑・浅緋」の「ころも・きぬ・そで」であったが、『源氏』では、それら「六位の沈淪」に関する表現が受け継がれるだけでなく、色については、「あおいろ」「あさみどり」「あさぎ（色）」のようにも多様化していることを見出せる。

さらに、直接的な語句として、「六位宿世」が『源氏』に2回も現れている。この「宿世」という語を沈淪の「六位」と結びつけて使ったものも、紫式部以前には、河原院の歌人（順と輔尹）にしかないのである（別の機会に述べる）。この「六位宿世」がまさに宿世のように、夕霧巻のテーマと化していることはその関連性を象徴しているよう。

#### (7) 日本語史資料の位置付け——平安前期の3系列と『源氏物語』

これまで我々は、平安前期の仮名書き散文の文芸作品を、ほぼ時代順に配列して、日本語史として見てきた（下記）の歌物語を、和歌の影響のあるものとして多少別に考慮することはあるが）。

しかし、『篁』だけでなく、それと関連が強いとみられた『宇津保』『落窪』も源順の作となれば、この3作品は、ひとり源順の日本語をほぼ投影するものとなり、日本語そのものの変遷というより、一人の人間・順の年齢の変化に伴う変化という程度になる（もっとも、この3作品の相違も時代的な点ではさほど大きいものではなかった）。これに、順が作者候補である『竹取』が加わるとその問題は4作品に及ぶ。

ところで、『土佐日記』の語彙を、『万葉』および平安期の4つのジャンル（和歌、日記、随筆、物語）と比較した石井正彦（1998）は、『土佐』の語彙は、日記よりも和歌作品（万葉、古今、後撰）に近いと結論付けた。『土佐』の後の歌物語、『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』は和歌作品（歌集）ではないものの、多くの和歌を含んでいるという点では、それらに近い面をもつとも見ることができよう。

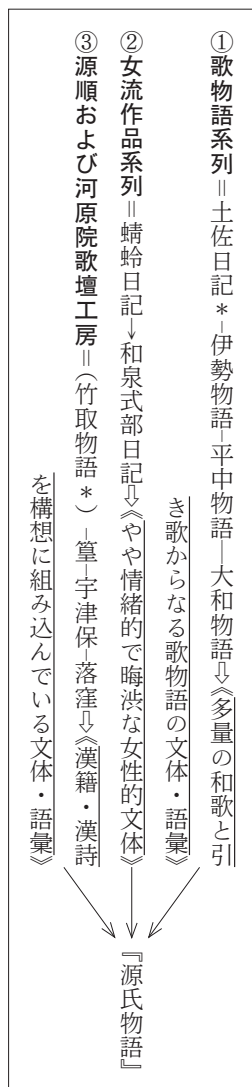
また、女流作品としては、『源氏』にも一部影響していることが指摘されている『和泉式部日記』と『蜻蛉日記』、そして『源氏』ということになる。

仮に、そのような大きな括り方で見ると、平安前期作品群は、以下の図のように、3つの系列にまとめることもできることになろう。

このように整理して配列してみると、従来のような1次元的、一直線的な配列による史的順番で配列した「日本語史」資料とは異なった複層的な日本語史がそれらの間には存在しているように思われる。即ち、3系列それぞれでやや異なる性質をもつと見ていく必要があるように思われるのである。

そして、それら3種類が、『源氏』という作品の中に取り入れられて、溶け込んでいるように見える点も興味深い（傍線部の特徴）。平安前期までの日本語表現の諸特徴が、新たにひとつに融合する契機となっているのが、『源氏』なのではないか、と見る視点である。順の作品が、ひとつ『篁』だけでなく、『宇津保』『落窪』までに及んだ場合に

おける新たな日本語表現の歴史として、視野に入ってくる課題と思われる（未完）。



(8) 従来の日本語の変遷資料としての源順作の資料群の位置付け

前項(7)とも連続してくるが、従来、『宇津保』『落窪』『篁』での日本語に変遷があれば、日本語自体の歴史的变化と見なしてきた。しかし、今後の『篁』の研究の進展によって、従来から言われてきたように、『宇津保』『落窪』(さらに『竹取』までも)が、ひとり源順の作品であるということになった場合(あるいは河原院歌壇の歌人と比較的小規模の集団の日本語となった場合)、従来見てきたような、『竹取』『宇津保』『落窪』の間での相違、変化というものが、当時の日本語そのものの変化や推移であったかどうかの見直しが求められる可能性がある。すなわち、源順個人ひとりの中での年齢による変化なのか、背景となっている日本語自体の変化なのか、という問題である(以下略)。

(9) 『宇津保物語』の作者説

『宇津保』の作者として最も有力なのは順である。一方で、その構成から見て内容的にも時期的にも段階的に成立したと見る説、それゆえ順を含む・含まないも含め複数の作者に拠ると見る説、順の歌と『宇津保』の歌とを比較して順作とは見られないととる説などの諸説が併存して今日に至り、確定を見ていない。

一方、『篁』での表現との類似箇所も多く指摘され、また、主人公・小野篁と、『宇津保』の登場人物の造形との類似性が際立っていることも指摘されてきた。

もし、『篁』が順の原作であり、順の周辺に、時に物語の創作をも担った複数の人間が順と知識や思想を共有して存在していたとしたらどうであろうか。彼らが、『宇津保』の構想の一部を担ったり、歌の作詠を時に分担して担当したり、あるいは、順が創作できなくなった後に、その作品を補筆することもあり得たかもしれない。さらに増補発展させて、今日あるかたちにするということもまったくあり得ない空想でもないように思われてくる。

為憲は『三宝絵詞』を生み出す力があり、能宣は古『住吉』を作り出すことができた。河原院歌壇の他の歌人には、屏風歌や百首歌などでのストーリー性もある発想の豊かな作品も見られるが、その他にも創作的活動をうかがわせる資料はほかに残されていないか、ということが気になってくる。そのようなさらなる裏づけ調査は残されているものの、『宇津保』物語の段階的成立説や複数作者説も、これまで述べてきたような、順の周囲の人々が関わり得たという環境を視野に入れて見ると、上記いずれの疑問や課題が解消するような解釈の道が、まだ残されているように思われてくる（以下略）。

このように、源順の創作作品の解釈とその位置付け、また、「河原院歌壇」の創作活動と紫式部との関わりほかは、



重要な今後の課題になってくるものが少なくない、と思われる。

## 9 エピソード

この夏に、本稿を整理しながら、奇妙な同じ夢を見ることが続いた。

紫式部が、どこかはよくわからないが人目につかない外の軒端らしきところで、人目を気にするような、隠れるような風情でひたすら紙を燃やし、くべ続けている。

煙が立つことを気にしながらも少しずつ紙をくべる。一枚二枚、三枚四枚と、番丁皿屋敷でもあるまいものの、こちらをあたかも見てはならないものを見てしまったような気持ちにさせる暗さがただよう。そんな妙な場面を自分が見ている理由は、見ながらにすぐに気づいていた。——本稿を書きながらずっと気になっていたのは、「源氏以前に、既に30作品近くはあっただろうといわれる、散逸物語の数々は、いったいどこに消えたのか？」ということであった。10や20作品は仕方のない歴史の長さだとしても、もう少し残っていてもよさそうなものではないか？ そのことがずっと、8章の課題を書く段階まで気になっていたからなのだろう、と。

式部の表情はわからない。しかし、所作からはためらいの様子がかがえる。周囲を気にしながら、何かに強いられて少しずつ火に当てていくようにも見える。紙は小さな火の揺らぎの中で、なぜか湿った線香花火のようにジリジリと、ジリジリという鈍い小さな音を立てて燃え続ける。それが赤い熱として伝わるせいかな、あるいは、彼女の緊張が伝わるためか、こちらまで額から腋から油汗がにじみ、衣類まで汗でまとわりついてくるのがわかる。

夢の奇妙さであるうが、やがて見ながらに、「ああ、あれは散逸した物語だ！」と心内語でつぶやく自分の声まで

聞こえてくる。「だから、どれも残っていないのか。」と。そんな発想を生んだ理由まで、見ながらにすぐにそれと気付く。ある「理由」を結びつけていたから、こんな夢になっているのだと。

以前から問いかけていた、「歴史の中で、複数あった資料が、残っていないようなのに伝わっていない事例は何かなかったか。類推できる材料はないか？」夢の前に、それと自覚的に意識化できていたわけではない。知識として頭の片隅にあったものが夢に結びついたのだろう。

『日本書紀』とそこに引かれる「一に云う」という多くの「一書」「別書」所謂「別伝」の類、それらを取捨選択してその国史は一定の国家の像に編纂された。それらの資料はどれも？残っていない。捨てられた記録・伝承があったはずである。都合の悪い記録もあっただろうから整理され、消されるしかなかったのだろう、と素人考えに思っていた。残しては利用しなかった部分までが曝け出されてしまうからなのだろう。利用したからこそ証拠は抹消されなければならないか。その彼女の手に『篁物語』はない。『篁物語』は、弟子の源為憲が隠し守ったので写本も少ないままに今に残ったのか、あるいは、『宇津保物語』『落窪物語』と同じ作者であるがゆえに共に残り得た、と見るべきか……。

式部は、その間ずっと周囲を気にしているが、ふと動かした視線の先、屋敷の中の奥の方に、燃やすことを見張っているかのような男の人影が動く。あの男に強いられることなのか？ あれは誰だろう、と目を凝らすも夢の中でも一向に見えない、いや、顔が見えても平安貴族の顔がわかるうはずもないのに、必死に考える。

六位の身分は、その頃既に、「いやしげなるもの、田舎、五位」（清少納言）以下であり、「何ばかりの数にもあらぬ五位ども」（紫式部）以下であった。五位・六位の沈淪歌人たちは、「多くは源氏であり、その他は、平・清原・中臣・曾根など」（山口博1967）であって、彼らの創作がたとえ優れた文芸作品であろうとも、藤原氏全盛の世で

は、残す価値など認めてもらえもしまし。

「いや……、あの位の高そうな服装は、ひょっとすると、道……？」と、生身のノドが声を出し掛けて動いたところで、最後の夢の目が覚める。

部屋の外、夏の日盛りの庭からは、複数の蟬の音が、ジリジリと、ジリジリと鈍い振動となって、耳の奥にねばりつくように響いてくるのだった。その後は、もうその続きを見ることができない。

これは、アネクドットや悪趣味な小晰のつもりではない。

【補注】 この「百首歌」の序の引用部分は、『源氏』乙女巻の次の歌のいわゆる引歌に当たるものとして、新たに指摘できよう（関連語彙は「紅の涙、緑、袖」および縁語「ひち」と「しをる」）。

「くれなゐの涙にふかき袖の色をあさみどりにやいひしをるべき」（夕霧↓雲居雁、全集本）。

この歌の直前に、夕霧の物語のキーワードと言える「六位宿世」の語句（本論文の後述6-4参照）の第1例目が乳母（女君の大輔の乳母）より発せられた場面であることは、極めて象徴的である。

その「六位宿世」の第2例目（藤裏葉）直後の夕霧の歌にも、源順の言葉が再び現れていることに、われわれは目を見張ることになる。それは、まず第1例目の乳母の言葉を喚起させた後に、「菊」と「浅緑」とが対比される場面である。

「女君の大輔の乳母【が】、「六位宿世」とつぶやきし宵のこと【乙女巻】、ものをりをりに【夕霧は】思し出でければ、菊のいとおもしろくうつろひたるを賜わせて、

あさみどりわか葉の菊をつゆにても濃き紫の色とかげきや（夕霧↓乳母）

からかりしをりの一言葉忘れね」と、いとはひやかにほほ笑みて賜へり。恥づかしういとほしきものから、【乳母は】うつくしう見たてまつる。

双葉より名だたる園の菊なればあさき色わく露もなかりき（乳母↓夕霧）（全集本）

（乳母の返しにも、「名だたる園」「菊」「あさき色」「双葉」が詠まれる。）

「菊」は高位（名だたる園）のメトニミー（換喩）でもあるが、色の「うつろひたる」「菊」が、「浅緑（の若葉）」（の色の衣＝六位の身）と対照的に描かれている。

一方、これより以前に、「順集」が「菊」を六位の身と対照的に描いている次の詞書を見出すことができる。

「〜御前の遣水に浮かべる残りの菊に思ひあはずれば、和泉ばかりに沈める身はづかしく〜」（斎宮野宮庚申歌台）の詞書  
そこでも「御前の」菊と「沈める身」（和泉守）の自分とが明瞭に対比（思ひ合わす）されている。これらの「源順語彙」と「源氏語彙」は、次のような見事な対応関係にある。

① 「御前の遣水」（順）は、「名だたる園」（紫式部）の庭にあり、

② 「残りの菊」（順）は、その花卉に「うつろひたる」「紫の」「浅き色」（紫式部）を帯びる花とされ、

③ 「沈める身」（順）は、「浅緑」（紫式部）の朝衣をまとう「若葉」「双葉」（紫式部）の低位である、

しかも、かの象徴でもある「菊」を、六位語彙と対比させているのは、順とこの夕霧の場面しか未だ見出せていない。キーワード「六位宿世」の場面2か所とも源順を踏まえているのは偶然ではないだろう。

「六位宿世」は順のイメージ下に造語されていることがこれで明瞭であろう。須磨巻での光源氏と菅原道真が重ねられているように、夕霧像の造形には少なくとも源順が重ね合わされているとみなせよう（さらに、小野篁や藤原季英も）。

このことは何を意味するか。この「六位宿世」使用の重要場面における源順語彙の引歌化、および、浮舟巻（匂宮と浮舟）での『篁物語』の使い様（井野2011）から推して、紫式部は、『篁物語』が源順によって創られた作品であることを知っていたのだろう。それゆえにこそ、これら二人の準主人公（夕霧、匂宮）の物語の重要場面に、源順の歌・序・詞書などのいわば「順語彙」と彼の物語とが組み込まれている、と考えられる。

即ち、このように、紫式部が、『篁物語』を「順語彙」と同等レベルに重要視して扱っていることから、源順と『篁物語』とを密接な関係、即ち原作者とその創作物としてみなしていると推定されるが、そのことも、原『篁物語』の作者が源順である、ということを間接的に補強する証左、と考える。

【謝辞】谷知子氏（フェリス女学院大学文学部教授）には、和歌関係の参考文献を探しあぐねた時に、源順ならまずS氏の注解や論などをとご教授戴いた。漢籍での類話については末岡実氏（元・フェリス女学院大学教授）に御教授いただくことがあった。前任校での同僚でもある畏友お二人の、いつものご助言に感謝申し上げる。

【附記】本稿は、はじめに菊地仁先生（山形大学文学部名誉教授）にご報告したいと思った。菊地先生は、学部時代の演習にて、『源氏物語』（若菜上）『枕草子』『土佐日記』『和泉式部日記』を各半期ずつ取り上げ、文学における研究方法や考察する視点などをご教授くださった。2年間で中古文学のこれら主要な4作品に触れたのはかけがえのない貴重な基礎的勉強となった。私自身は、『枕草子』の時の諸本比較のような、書誌、文献批評、データ比較のような日本語学的作業の方が、いまでも当時の資料を手元に残しているくらい楽しく印象深かった。毎学期、同学年の浅尾広良君（現在・大阪大谷大学文学部教授、平安文学専攻、博士（文学）が最初に行う模範発表を手本にしつつも、片や自分の発表が、文学研究の素養にはほど遠いことを自覚する契機となり、日本語学専攻を選ぶ理由の一つともなった。『源氏』は日本語学上も重要な資料であるが、個人的にも強い関心があるのはこの演習に溯るように思う。今さら引き合いに出されるのも先生にはいい迷惑と思われるであろうが、本稿を、学恩に感謝し、追加レポートのようなものとして、菊地仁先生へ提出したいと思う。

【参考文献】（年代順、小野篁関係も含む抄録）

- 後藤丹治（1927）「新たに知られた小野篁日記」『国語と国文学』5—12  
宮田和一郎（1935）「篁物語」『国語・国文』4—8  
今井卓爾（1935）『平安朝日記の研究』昭和10・10、啓文社、今井1957略  
後藤丹治（1936）「篁物語新考」『国語・国文』6—11  
菊田茂雄（1955）『新講篁物語』昭和30、私家版  
山口博（1957）「篁物語成立に関する覚書」『文学・語学』3  
菊田茂男（1957）「篁物語成立論」『文芸研究』26  
遠藤嘉基（1958）「篁物語攷」『国語国文』27—11

原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌（安部）

原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌(安部)

九六

- 大森郁之助(1961.08)『篁物語の底辺——民俗伝承における篁観の対応——』『国学院雑誌』62(7-8)
- 大森郁之助(1962a)『篁物語の形成——人物待遇意識と作者の位置とに関連して——』『文学・語学』26
- 菊田茂男(1964)『篁物語の構造についての試論——篁物語研究(第1部)——』『東北大学文学部研究年報』14
- 山口博(1965)『篁物語虚構の方向』『文学・語学』35
- 犬養廉(1967)『河原院の歌人達——安法法師を軸として——』『国語と国文学』44—10
- 西木忠一(1968)『篁物語』考(4)『滋賀大國文』5
- 阿部俊子(1969a)『篁物語の成立年代』『延喜天曆時代の研究』、昭和44・4、吉川弘文館
- 阿部俊子(1969b)『歌物語とその周辺』、昭和44・7、風間書房
- 小久保崇明編(1970)『篁物語校本及び総索引』、昭和45、笠間書院
- 増淵勝一(1971)『紫式部とその周辺資料』『源氏物語講座 第六卷 作者と時代』、昭和46、有精堂出版
- 石原昭平・根本敬三・津本信博(1977)『篁物語新講』、昭和52、武蔵野書院
- 黒木香(1986.12)『篁物語』成立考——兵衛佐を手掛りとして——『国文学攷』112
- 黒木香(1987)『小野篁の変貌——冥官説話の変化をめぐって——』『源氏物語の内と外』、昭和62、風間書房
- 小林芳規(1987)『かくひち』と『文のて』——篁物語の成立時期についての一材料——『汲古』11
- 平野由紀子(1988)『小野篁集全釈』私家集全釈叢書3、昭和63、風間書房
- 松浦照子・片岡信二・安部清哉(1991)『平安文学における形容詞対照語彙表』『フェリス女学院大学文学部紀要』26
- 津本信博(1992.04)『篁物語』『国文学解釈と教材の研究』37—4
- 森下礼子(1994)『たうめ』小考『玉藻』30
- 仁平道明(1995.12)『篁物語』の結婚譚と『孔子家語』『むらやま』32
- 土方洋一(1996.03)『小野篁の二つの歌』『青山語文』26
- 安部清哉(1996.03)『語彙・語法から見る資料——『篁物語』の成立時期をめぐりて——』『国語学』184
- 石井正彦(1998)『ジャンルから見た『土佐日記』の語彙の特徴』『日本語研究法 古代篇』、おうふう
- 黒木香(1999.03)『小野篁の遣唐船乗船拒否』『活水論文集・日本文学科編』42

妹尾好信 (1999.07.31) 「平安朝文学における角筆使用二場面の解釈——『篁物語』と『蜻蛉日記』の読解私見——」『古代中世国文学』13

平林文雄・財団法人水府明德会編著 (2001) 『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』、平成13、和泉書院

久保木哲夫 (2002) 「解題(『小野篁集』)」『冷泉家時雨亭叢書第五期第六十九卷 承空本私家集 上』、平成14、朝日新聞社

承空本写真版 (2002) 「小野篁集」『冷泉家時雨亭叢書 第五期第六十九卷 承空本私家集 上』、平成14、朝日新聞社

黒木香 (2007.03.31) 「史料に記された人間像——小野篁薨伝をめぐって——」『古代中世国文学』23

阿部好臣 (2007.01) 「篁物語」『日本語学研究事典』、平成19、明治書院

平林文雄 (2007.04) 〈翻〉承空本片仮名書本『小野篁集』対校本』『文学研究』95

井野葉子 (2008.03) 「浮舟物語における篁物語引用」『清泉女子大学 人文科学研究所紀要』29

安部清哉 (2009.03) 「篁物語」承空本(『小野篁集』)に関する研究課題」『人文』7

安部清哉 (2010.01) 「篁物語」の井野葉子氏「源氏物語」浮舟巻での引用」説補強ならびに祖形小考」『古典語研究の焦点』、平成22、武蔵野書院

成22、武蔵野書院

井野葉子 (2011) 『源氏物語 宇治の言葉』(森話社)

安部清哉 (2014) 「篁物語」佐藤・前田編『日本語大事典』、平成26、朝倉書店(項目執筆)